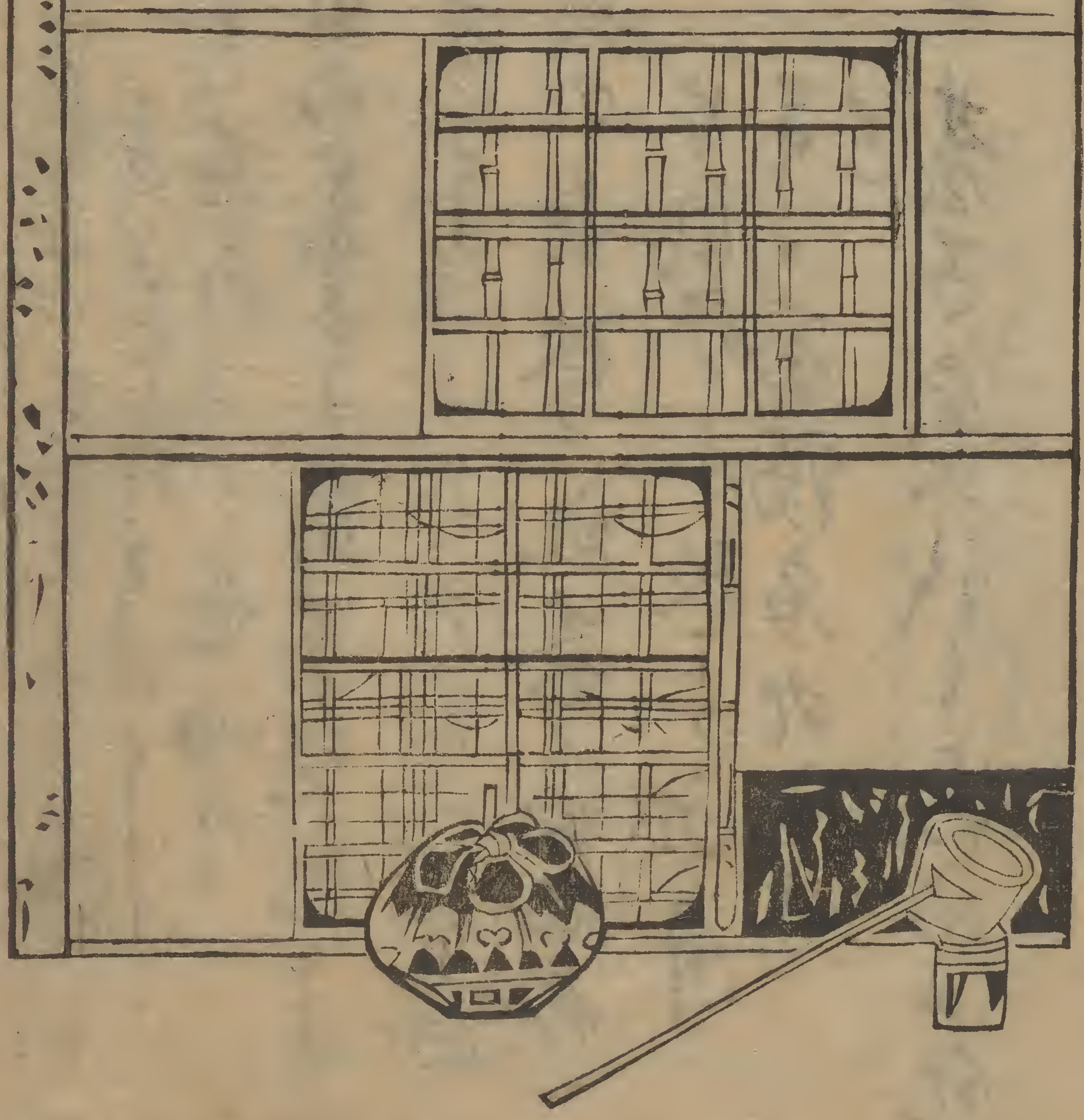
茶湯獨リ謂 三

453

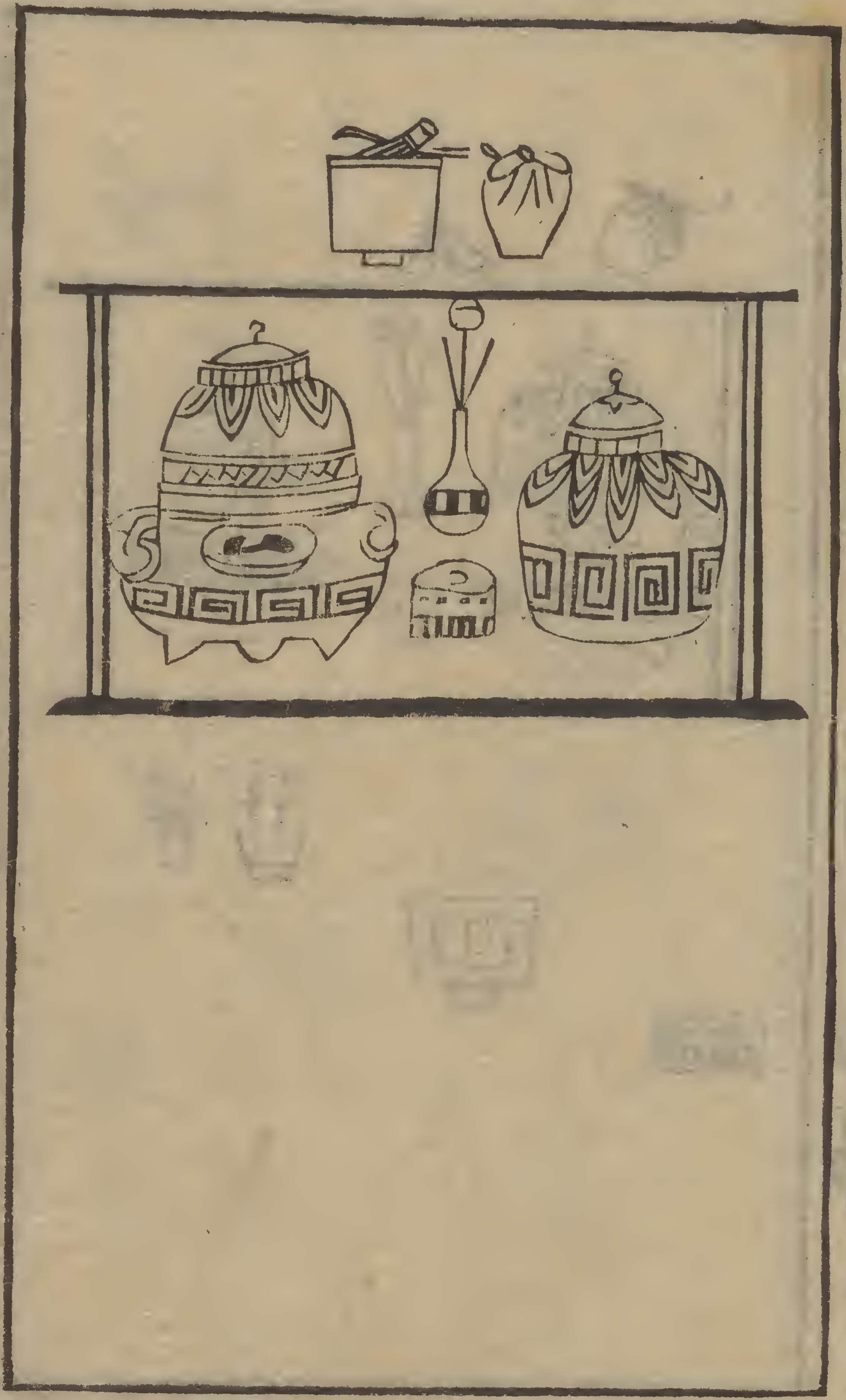
茶湯獨溥三。拾抄莊圖

山荘夜会
ヲ拾抄ト
長張の茶
入ト荘布之
家ありさき之



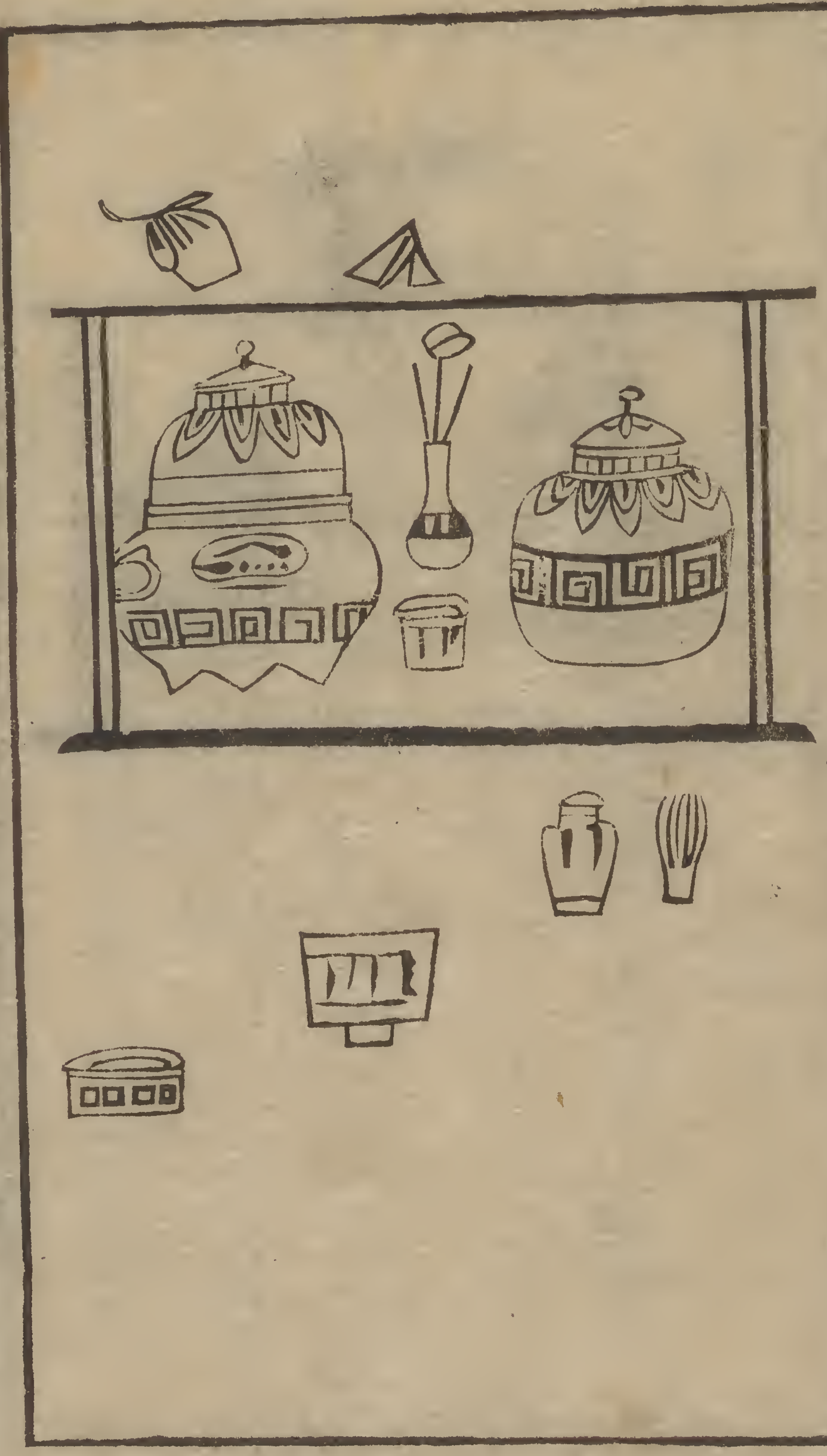
真之臺子ハ三百よ子ト云也
臺子七飾とも云よし
初手 ありし荘あらし飾也
真の臺子よ筒茶碗置よ
真の臺子ヨ井戸茶碗立ノ分
真の長板ヨ丸茶碗之分
付風炉小板とくの事
荒ヨ茶湯名みこと
已
行真之臺子奥儀之分ハ紀

真の臺子ヨ露肩茶入 筒茶碗立
一露肩茶入ハ唐物鳩也古瀬戸乃類名物也



此分ハ飛石ヨ出手有たあひし難ひ事也

さりながら先づ手の花は別条



一 蜀茶碗うんかん縁付ほんなん錦手青磁
せう類内之茶碗用常也楽焼も用ル事もあり
茶巾 袋茶巾不するや 極之茶巾折まゝ住也

客ノ座ニ習ふつきみ茶碗にあまり客と
茶杓などの掛物之写真の裏御飯にゆびをも
入れにも茶袋を押付ままに都に嘸に吸也

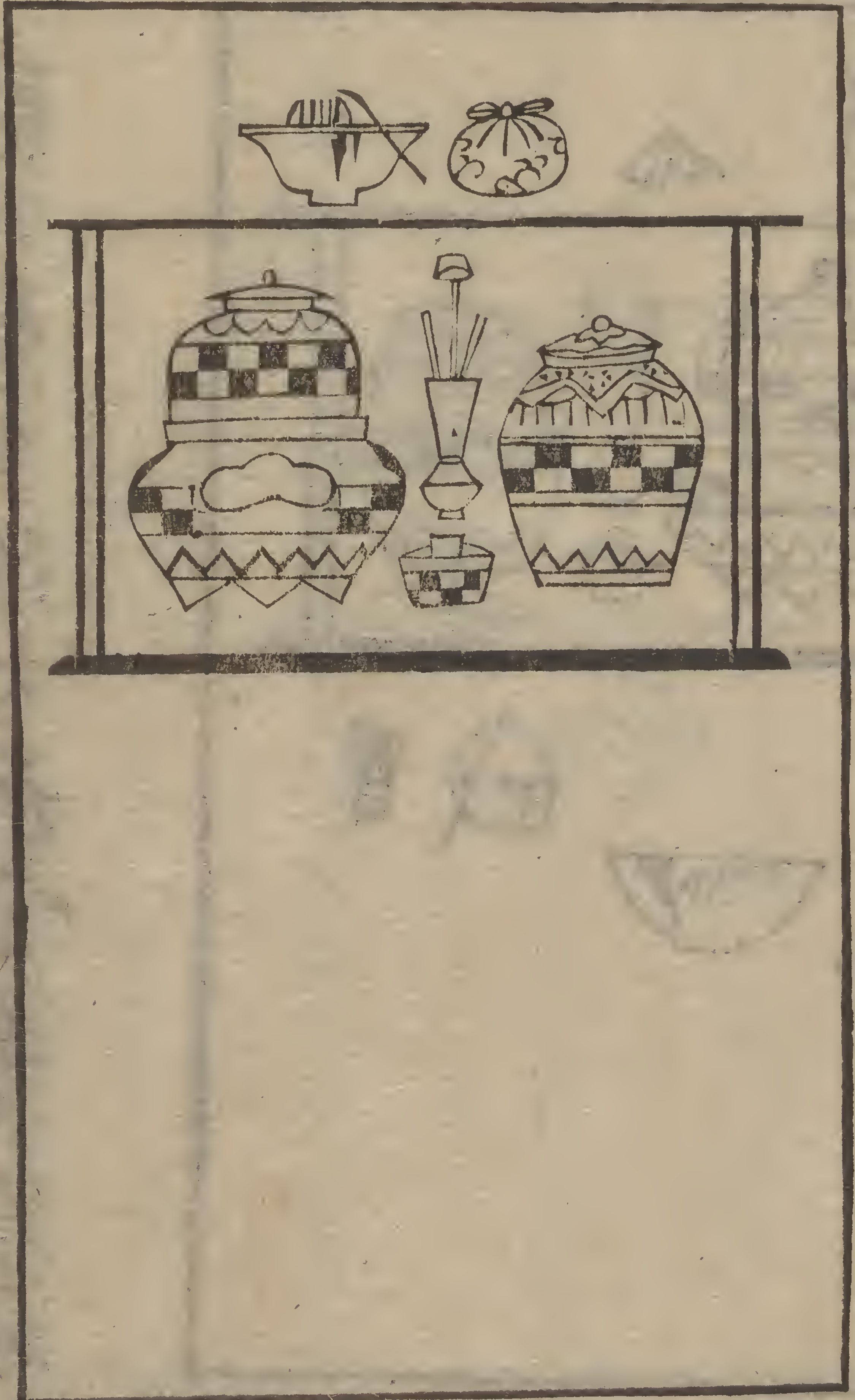
一 土風炉手も火口の広さまより極異

手は双へ出筅を引也
一立様　帛紗をたゝみ中結不成茶入茶碗
をおろし指にて茶巾にて拭也たゝみ置
品の下に置客より客へ向くにて去挨拶
メたれは茶碗茶筅の下に置茶入の紐とき
袋の口を解き菓子白上帛紗さばき茶入
中じめの白口を拭置茶杓にて茶入のよ
かけ茶筅置茶入の脇に帛紗こさみ
茶巾置さて蓋を取菓子白上蓋を取柄杓
立の前に置帛紗にて蓋を取柄杓取て湯
一柄杓茶碗に入柄杓を手にかけ茶筅通しをする

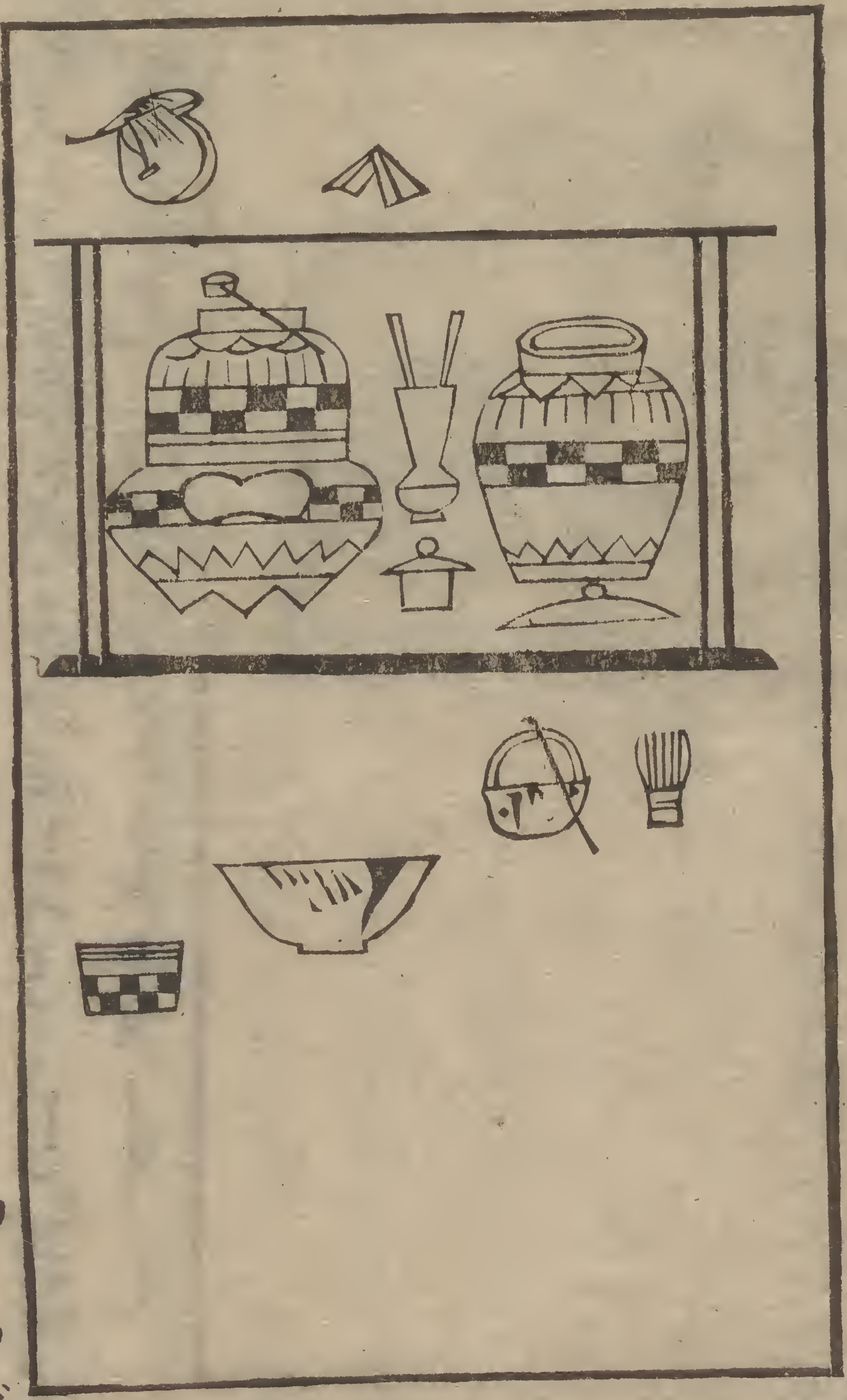
き也真の柄杓ともいふ也柄杓茶筅先取濯
次にえつうじん引上見茶巾茶碗を茶巾を
拭茶碗座内を先茶巾内拭を取茶巾を
置茶巾を茶碗の下に置茶巾取さて茶入蓋
子へ上茶入れ取て蓋を座茶巾に茶杓取
茶を入ちやうにかるう茶入の口
お手引茶杓にて茶碗打茶杓先を置
茶の蓋を置柄杓取てつこ取置
茶柄杓汲出さしかへまはして水入茶の
けゝ也汲湯ばかりに入ずつ
まで也柄杓を切ひきとん引付
置也宗和流宗旦千利流へ

乃習なりや　茶筅をとりて茶巾を置侍れハ
を出して、中にもなく茶筅をとめて置帛紗
ま扱もし茶碗出しと　客　捨扱候二三人のにあ
をさし　客茶呑ちらす亭主ハ皆手へ入らるゝ
かいり湯なんと所くゝい様見て出す手右
をかたに　めくさ湯のにありを取　又茶碗持て出し取
めくと見ハ勿論を下の釜時　客のうけ分記
あり亭主ハ此時宜云湯をとくとしなれ
をとる手へ添香一入茶筅ニさハくとさてきし
捨をつくと茶巾なん　中入ハ此茶巾　稀とる茶
巾ニメ入也　茶筅入　茶扱巾ひろけ茶入右へ置
也　茶碗　給合　柄杓扱れなり立つあるも入答此蓋

立見　柄杓扱替　柄杓立へさし入へ　右指のつさ三ツ
時茶入二ハれる　捨扱添茶碗　蓋子の上へ上ゲ茶
入巾ひもスく　おむ薄と　又茶の口よつまろくを改メ出す
茶扱　袋二方廻ハつまのはくよもスよし



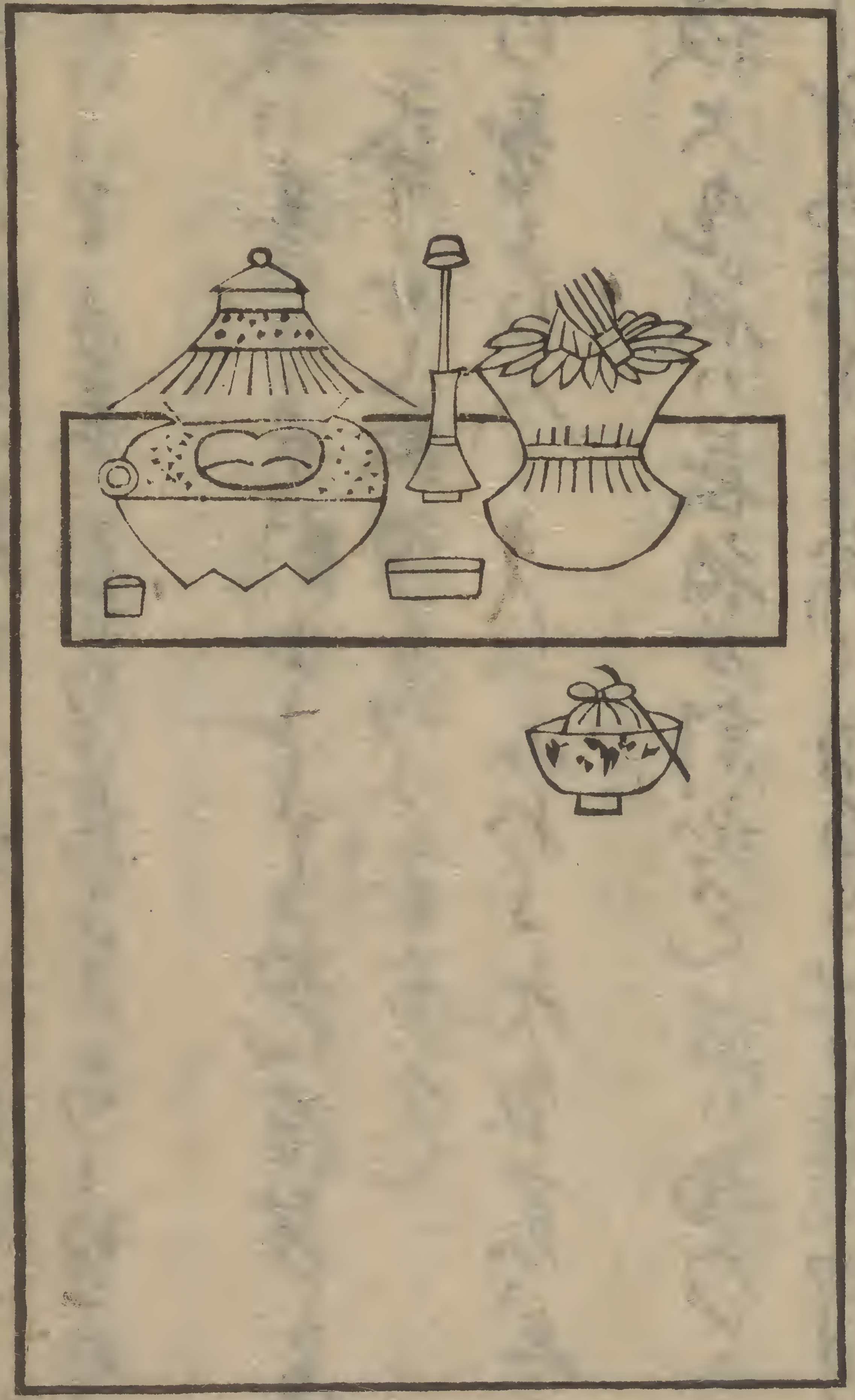
貞の臺子弦付茶入ニ井戸茶碗點



一弦付茶入唐物絵物類多し 覆紐出づきかり
茶亭碗ハつゝの子茶子井戸茶さと云茶巾也

ま習有之 先ツ子の亭碗まて 古鉄台し
○井戸茶碗ハ有地とそこハくまあらいて
まさりしかんふりえにて いらぼうも具類し

長板
仕廻
茶入
荘



右袋子ニ真ニ草有　草ニ真有ト云習有
けれ共口伝ニ可成草の袋子ニ而も習有之
○長板ハ袋子ニ同折(ヲリ)出しにも置合　荘方ニ替リ
有之　天井有し敷板ノ類ニ置(サキ)合スこ
又草の袋子ハ人にもしれ有る取合無キニ在
○右板大丸板ハ長板ニ割出ス之　荘ハ袋子之ニ在し
なるしを右板ニ取合し振舞ら也尺縁ニ可有之
是ハ古風也茶也可風炉ニ置可き是ハ分ニて入
前ヘてうさ手ニ用ニ而候と見へ茶碗前ニ置候
つるニ土器の蓋をかへし又ハ置くたれ

ふりと右第ハとん道をつるのりもある
○長板ニ如ミ風炉ニ如ミのぼりあけの
なるし上ニ茶筅荘ら也　是ハ茶の湯と云
茶入を飛ぬ茶碗ヘ右へ入にも習ありも
むかさを以てる茶碗へ入の也
○雲龍風炉ちりきし丸古兎の之から也とう
とゆへと申所ハ気をつれ作のちやると云習
あり又ハ昆の之測濱おく云ものし
風炉の欣ハ右ハ細(コ)ニ石台　香まいニやらと畠
君也ハやら右熊茶吉

茶湯ハ名所の茶湯と云事有
みあさとの茶湯といふあり
月見の茶の湯
お節供の茶の湯
元三大服のちやの湯
口切ひらきしのこお(?)
さんてのぜ(?)のあと云事あり
貴人あつらへ好つき抔といふ事有
百服立
侘數寄　ひとり茶湯　夜会　菓子の
茶ノ湯　会席の茶湯　かげのちやの湯

一 宮(?)あまあつかし　七夕借(?)あり
○ 蒔(?)亭の類と云て　唐の人　机の上よりとり出
とのもん御亭(?)色　勧め拵え　是とうよふなき
事といふ
それの此　蓬(?)ゐ　人形なとのこと
ひよのへきこ
さいかい事
ちく　蓬萊　是とられどもよふ
それや香紙かい事
印判
挿げし
さのあき　四角もの　汁類　あらあり

真之臺子盆點之事
大盆立　臺天目　濃茶入二つ組合之圖

真之臺子長盆　臺天目　茶碗七服立之圖

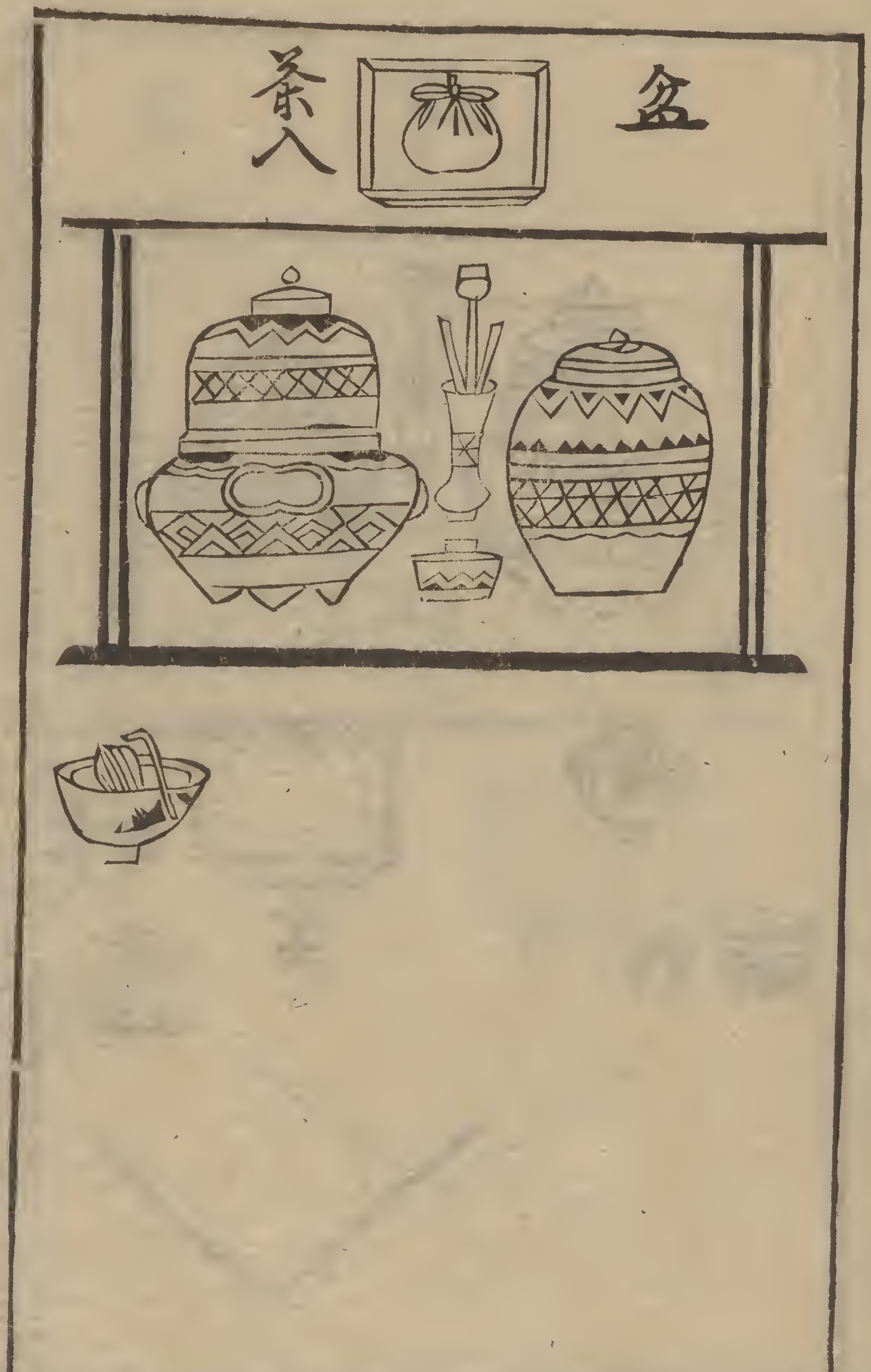
真之臺子大盆小盆　臺天目
唐物茶入立樣の圖

真之臺子大也盆立の圖

此臺子の點まへかまへし
長くし一やうにもいとまあらみえらしき時ハ
万をあらためし

莊　臺子　天目二　盆　茶入

○真之臺子盆點之圖

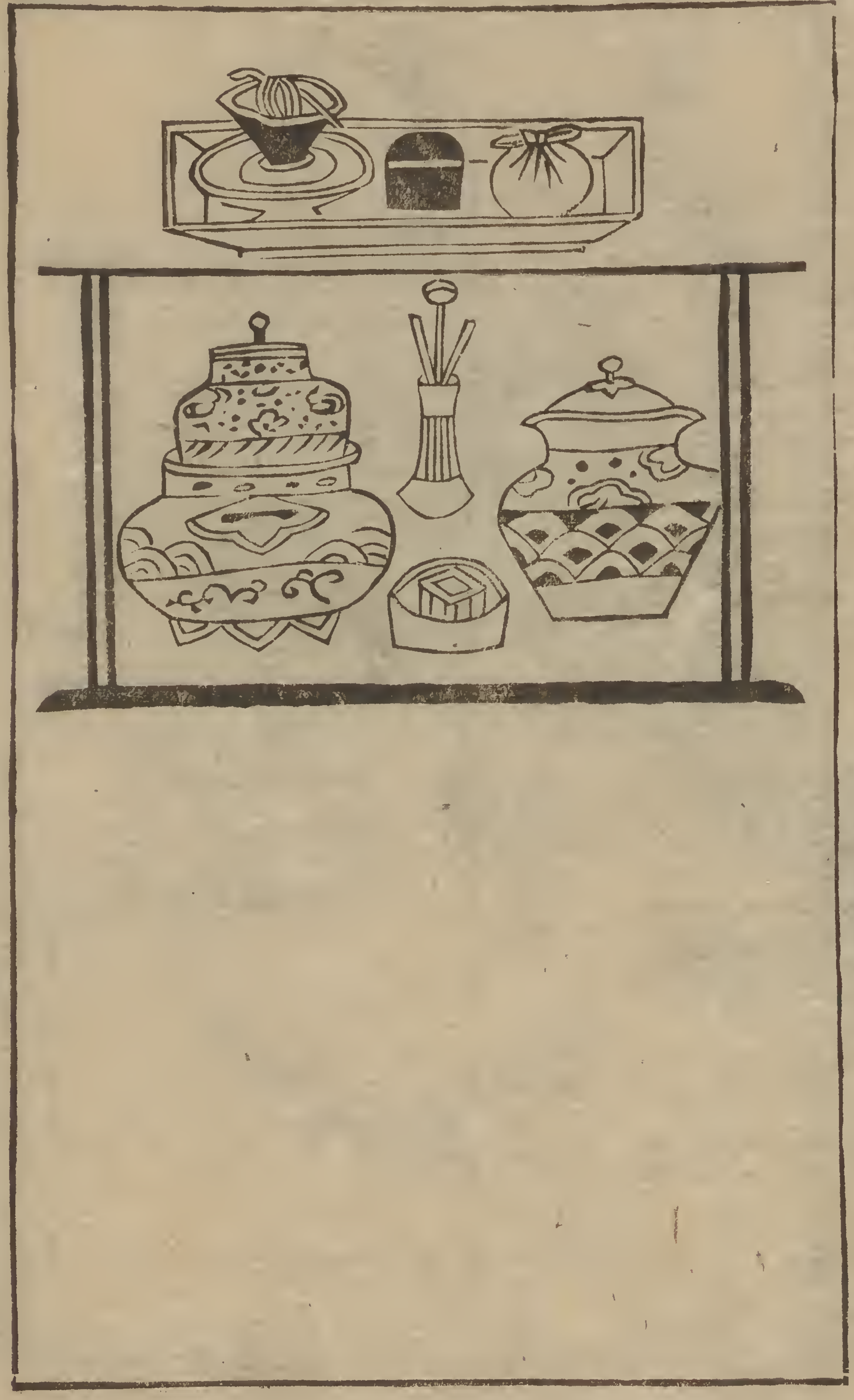


○唐物茶入盆かざし帛に而也

真の茶入に
盆立點様也

茶立茶碗帛出ス
茶筅うら蓋に置

○真の臺子ニ臺天目瀬戸の茶入利休居士よ
り茶を何も大盆子三ツ組合荘の品



○茶巾　○筆　盒　よ　ゐ　○袋

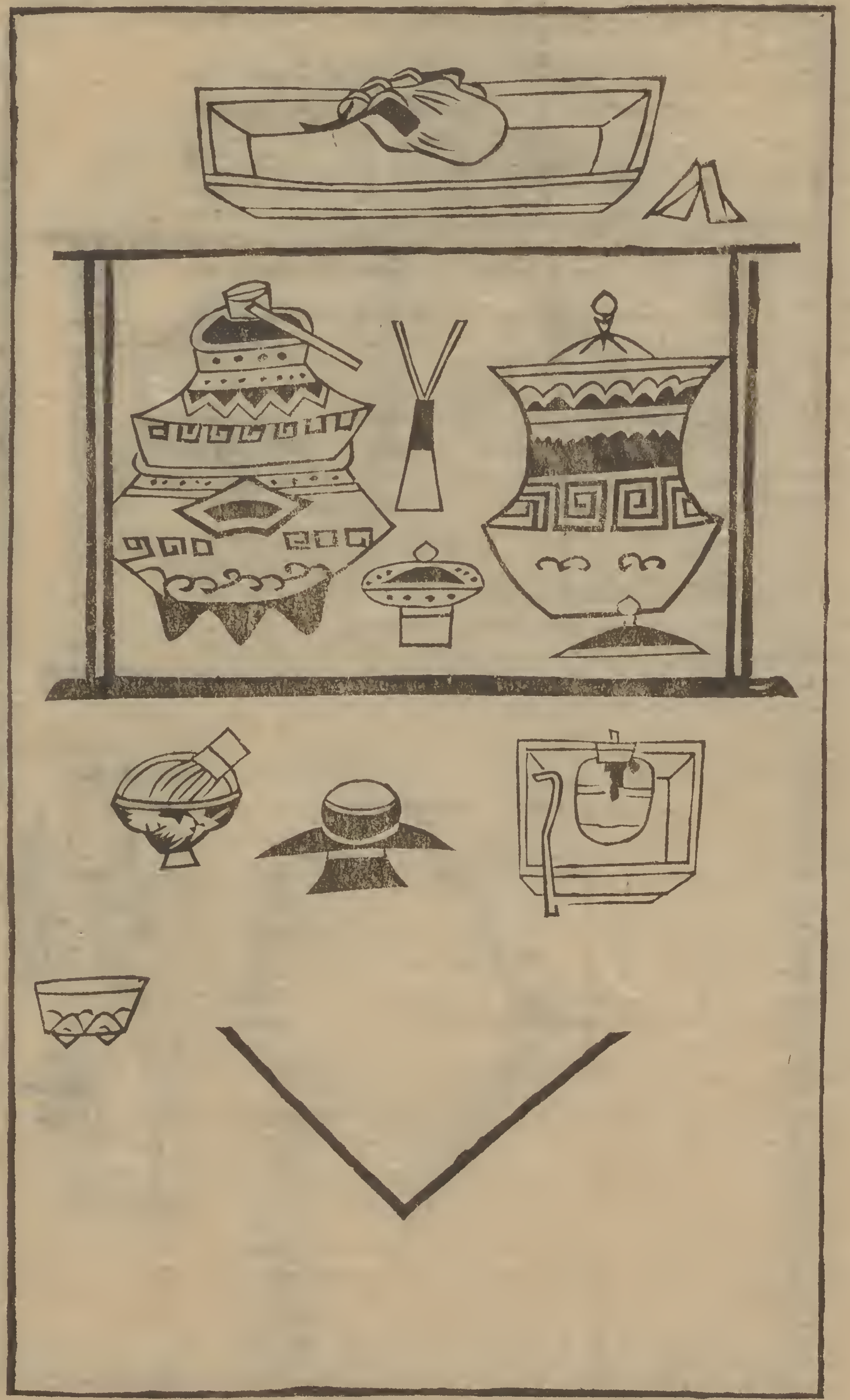
臺天目點茶のしまま立ル也但茶筅ハ
天井へめ茶より上茶や

○真の臺子長盆
臺天目并薄茶點の図

○真の臺子　大盆　小盆　臺天目
唐物茶入　茶點揃し図

長盆二
茶入
二ツ
臺天
目の図

○長盆は小角ならは座敷の天目
あひしらひと云ふ飾也図よく



まを　手前次第也　秘事は
又荘貴人の茶家也荘子茶を飾

八先哲古御古来云先師の秘事也後
又と見へしとのいひ伝へ也とも見[illegible]

とし給へ　[illegible]

○真の臺子大乞盆 臺天目
荘立様ハけやゝし勢よ見ゆへ

けれは 栓もの立花 荘方有 物ことに一花ん
なりあれと まつ〳〵花して手前あるへき

初心のうちハ何ゝ維もその家めとなりし
師範指人に皆下にまうとハいはぬものし
いか是い雲よまつてもいまだるりのいひ若
メ問ともし書てぬるほまる真の茶湯
気かまへ 物殊とにまちるいあるしと紳の佛
随まミうんへいし定さる事に勇をたん
まかりな善心百五と立としも扇の節の
ちらふ示とるんて毎日お勤あるよ松の木
のまくし数寄人の宗の列侍居去よ茶道立
といふものもゆへよ習ゆゑんきまんてふまる
石ろ先生へ先とともも先生携るとも離
きつし嗣よ蓋のもうよ中縁よ相つあゆあまり

其心志善道ハ松まよくしたてつよし

とし存袖より松とん心得るもよ存松色数寄や

とわけるものすあし先師些くし而

洛冥のみお傳我此外今か奥深秘

なのこ

○つかのまり奉世かもりなし故与りかり候